

天理大学附属図書館蔵大隈言道『続草徑集』翻刻と 解題（一）

進藤，康子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/15081>

出版情報：文献探究. 46, pp.36-56, 2008-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

天理大学附属天理図書館蔵

大隈言道『続草径集』翻刻と解題（一）

解題

大隈言道の家集『続草径集』天理大学附属天理図書館蔵本（以下天理大本）を翻刻・紹介する。

『続草径集』は、天理大本の他に、実は同名の家集が、九州大学附属図書館（以下九大本）にあり、すでに先学^註による翻刻がある。九大蔵の『続草径集』と天理大蔵の『続草径集』は、もともと一つのまとまった集であったようで、これが二分され、その後それぞれ別の図書館に入ったために、この集は別れ別れになってしまったかと推測する。今まで解き明かされなかった言道の老境に辿り着いた歌風も看守でき、言道の晩年を知る上で、大変貴重な歌集であると思われる。

久松潜一の論説^註によると、九大本『続草径集』（請求番号 544・

ソ・16・183・4）には、佐佐木信綱自筆による添紙があり、

進藤康子

「続草径集一冊一巻は言道翁か晩年の集にして 文久三年より慶応四年まで約六年間の歌数四千余首をのす 翁は此集に名つくるにいたらせて世をさられぬ ことし大正七年三月原本を二分し最後の十数葉をわかもとに蔵し 他を梅野君の蔵せらるゝことゝなりぬ この集の名を続草径と名つきて其よしを一言かいつく 佐佐木信綱」

と記され、『続草径集』の呼称は、佐佐木信綱が仮に名付けた事がわかり、また、もともと一冊であったものを、信綱とその弟子梅野満雄の二人で分け合った経緯がここに書き留められている。実際、天理大本（五十九丁）、九大本（二六一丁）の書型は、それぞれ縦一八・二糎、横一二・三糎と一致する。

また、久松解説に「続草径集の前半は、梅野満雄氏蔵し、現在は九州大学図書館に蔵せられ、後半は、佐佐木信綱氏蔵し、現在天理図書館に入っている」とあるが、天理大本の表紙に、佐佐木信綱による「大隈言道自筆詠草大正六年四月福岡にて得」との墨書、およびその冊頭に、言道の蔵書印「牆」「東」があり、九大本の表紙裏の方に、総紙数、総句数が記されているなど、底本の前後関係も含めて、今後更に精査する必要がある。

今回、天理大本『続草径集』約千四百首の言道の歌を、紙幅の都合上、連載により翻刻・紹介していきたい。

書誌

請求番号 911・26・61 天理大学附属天理図書館蔵本。

書型 縦一八・二糎、横一二・三糎。 写本一冊。

外題 『續草径集』(後補) 表紙に「大隈言道自筆詠草大正六年四月福岡にて得」と墨書。

内題 なし。

印 冊頭に「牆」「東」(言道の蔵書印)。

丁数 五九丁。

一首一行書き。一面十一首〜十三首。

凡例

- 一、底本は天理大学附属天理図書館蔵の大隈言道自筆本によった。
- 一、原本の片仮名書きの部分はそのまま残した。字体はできるだけ原本を尊重したが、現行の文字に改めた箇所がある。
- 一、清濁は原本のままとした。
- 一、底本は自筆本であるので、推敲の跡が残っているものがあるが、墨で潰れて判読不能のものの中にはある。それら推敲箇所は一部省略した。

- 一、見せ消の部分は【】で示し、その右に推敲後の傍書を記した。未定のまま傍書されているものは、そのまま並べて記した。
- 一、歌すべてに通し番号を付した。
- 一、かなづかいの誤りなどの箇所は(ママ)と記した。
- 一、○ ● ● ● / / などの記号は原本のままとした。
- 一、丁付を、(一・オ) (一・ウ) のように表した。

翻刻

- 1 ○めぐりくる一月のまの早さかな又も今夜は三日月のかけ
- 2 ○ふきめくる風のまに／＼大たわのたはになたれてふるみ雪かな
- 3 ○いつこにて船々きつる末ならむうら人ひろふいそのもしほ木
- 4 ○うちたるゝ柳のいにとつもるゆきよこさま乍風のわさかも
- 5 わかもたる花の枝にもつもる哉杪の雪を折しはかりに
- 6 ○降ゆきもくたけましり【て】なりにけり空晴かたになりやしぬ
らむ
- 7 ○野にいてゝかへりくるまの顔にいつも出ぬる名月の影

清海某春日出新田別荘十景之内 二上山雪

- 8 ・二上の山のしらゆきもろともにきゆれはきて降はふりけり
- 9 池水のそこにすまへる龜すらもうきてうかゝふ初秋の空
- 10 わかためとおもふもしるく梅の枝まとによりきてひらきぬる哉
- 11 けさひらく花もねさめのけしきしてわれにひとしくあけほのゝ空
(一・オ)
- 12 ○さくうめの枝のともすり歎つゝいねこそやらねよはのあらしに
- 13 垣間よりゆく水見えて中々にあれたるやとおもしろきかな
- 14 わかやとのそらは過なて村山のそなたさまにも更る月影
- 15 おもしろくみちくるしほにたゝらかたうろくつの子のうれしかほなる
川
- 16 さくらはなさきにしひよりいでこかけの石はわか身也けり
- 17 夕されは立きりかたき花のまをみそらに帰る鳥の一むら
- 18 ○ななれ【ぬる】行水尾は水尾にてやりかほに桜かたよる岸の岩陰
- 19 一筋に棚引くもの末迄も行空見ゆるあちのむらとり
- 20 かへるまも又わたるへきはし乍いつまで見たる水のしら波さ
- 21 川風も汀はけしく吹ものをそなたにはしる庭たゝき哉
- 22 ○はるくるゝけしきを交せてちる花に爰もふたけるさと陰の井
- 23 風あたる花の一木は大かたのちるかうちにもちるけしき哉
- 24 ○わつかなるわかすそ風に何事そつきて乱るゝ花のしらゆき
(一・ウ)
- 25 春川のなかれもゆかぬ【フチ水のきし杭の】花のうちにも並ふきしくひ

- 26 ○山の井のせまき水にもさくらはなちりあらそひてうくけしき
かな
- 27 おのれさへそなたゆかしみ朝兒のとりつかまくやほしき笹垣
- 28 垣のとに行顔ながら顧てもとやこひしき朝かほのはな
- 29 ○いつこにかちりゆくと見し桜花【そこちかくに】うかひぬ池のなかよ
と
- 30 つらとりて引はいくつもいてく也をかしきものは畑の唐いも
- 31 ○たをやめのそてくゝりても行燕いつ身をかへしそらに飛らん
- 32 庭といふにはにもあらせてせまけれとさくらちりくる細あひの
風
- 33 あふちこそはましりにしてさきにけれ中々しるき花の紫
- 34 ○大かたはゆきとちれとも椿のみくたけぬ花を拾ひつるかな
- 35 おくれしとあさへかほにもやとの花はしむ計の人にちりきて
- 36 ○いかはかり雨ふくみ【てか夕立のくもたるものあらむさも】おもけなる【をちか夕立
この空の雲】
- 37 ○二重戸の板戸昏戸もせきたれと猶とゝとなるさよ冬ノあらし哉
風
- 38 たれならむ門を入くる人音のこゝろあてなるともなしにして
- 39 をやまたの一田々々にいろかへて今さかり也すみれなの花
- 40 ちる花もならふ垣ねにあるものを貰もとゝめぬ青やきのいと
- 41 灯もきえはてかたになりにつれわれよりさきに【たき】ゆる命か
- 42 ひはりあかる空のみ見たる浅茅生に何をもしらす立つくし哉
- 43 ●行水にくつれおちたる川のすのきはくしくものこる白雪
- 44 まことにも日々にあたらし朝顔のきのふの花は一ましらて

- 45 竹のよのほとをい^ヘな^ダきて^テ鶯の近く遠くもなく^コか^エ哀^ノさ^ヨサ
- 46 谷川のぬせきを落る水しらすうかれても行花さくら哉
- 47 あるしには折もとらずと偽れとこす糸の花はしれるなりけり
(二・ウ)┌
- 48 ともすれはそなたにのみもちる花のありところや思ふまし
つ
- 49 かさねても追に追行山風に川さへこえてちるさくら哉
- 50 はるさむみ道の長手のなかきにも立るつくしの二三のみ
- 51 このまより夕日てらせるこのものゐるにはをしき苔むしろ哉
(三・オ)┌
- 52 ^{ミネモラモ}大かたはさきかくされて山口のわつかにみゆる花の下道
- 53 さく花はよのまにぬふることもなく火をさしよせて見れば咲
つゝ
- 54 たか折てえたとまれる花の枝落こぬさきに及手もかな
- 55 はるふかみなかるゝ川のさくらはなとまらまほしくしたる岸杭
- 56 かすしらす帰る物から先立てゆけるやことにいそくかりかね
- 57 わかいほは山のふもとのさとなれはかたはらのみそひもてらし
ける
- 58 いろいまたうすくれなるのうめの花こきかに冬もにほひける哉
- 59 まどちかくうゑたるうめは何故そ枝をりとらてみれば也けり
- 60 花をのみをるとみゆれとにはの梅のかはいくはくか枝にそふら
む
- 61 いくはくも一手にもたる梅のはなすりあふ枝につほみこほれて
(三・オ)┌
- 62 ゆたけにもけふはあらしのなひかせて心にあらし青柳のいと
- 63 山のへとおもひし程にわかさとにゆつりこしても立かすみ哉
- 64 みつしほになかれもとせる桜花なきれいにしをゝしむ印に

- 65 花のまのいへもろともにかくせれば霞計そ立岩のさと
- 66 吹風に乱て匂ふうめかゝのけさしつ／＼にくるたもとかな
- 67 行かふとおもへは沈む鳩鳥のいつくのかたにまたうかふらむ
- 68 あられふり雪ちるころの臘サケツクリ 醅サケツクリはるを思へは楽しからすや
- 69 としくるゝこよおもへは過しかたあやまちてのみ月日へにけり
- 70 手をかく折むとすれば折かねてわつらはしきは花の枝哉
- 71 ゆくすゑはいかにかしらす雲のこと先花さける郷の入口
- 72 山川のならへるいしを飛々てそらさへか行庭たゝき哉
- 73 いつより【か】そさかむとおもふ花心含て見ゆるにはさくら哉
- 74 わかそのにもゆる春艸七くさの数はたられてもわかたとそつむ
- (三・ウ)
- 75 花見つゝうかれありきの我身社風のうへなるものにはありけれ
- 76 雨ふれはたまりもあへす溜り水あわたゝしかるなかれさま哉
- 77 そらとほく風にたゝよふさくらはな軒はにちかく乱あへかし
- 78 のへにつむわかなとおもへはやとなからうそゑキクモ【おとし】めつらしきかな
- 79 【水】いと清くあさしとおもへは早川にはかに水のふかみどりかな
- 80 みそらより向ひあひたる水の月われさへ同じ友とならはや
- 81 かそふれはやをらきのふも過にけり花待のみのはるの一月
- 82 さくらはな家といへとの細あひをいつくゝりきてにはにちるらん
- 83 時のまもむかへるひまの無身もて又きにけりな初花の陰
- 84 たをらるゝ事もおもはて梅の花さしたる枝に心見ゆめり

85 うゑおきしわか故郷のさくら花何地向てか花さきぬらん

(四・オ) ㄱ

86 なかるともななれぬ川のあさせより身をよこふせて上る若鮎

87 うくひすにあよともさせる梅かえをわかためかとして人そ折ける

88 しはしたに陰にえあらず帰りきてまたみにきつる花桜哉

89 さくらはなこゝに扇をひらきあけてこゝにといへは爰にこそち
れ

90 山吹にはねすちりあふこのもとは不鳴かはつ呼吸のいふかしきまで

91 野をゆけはそてより袖にいて入てわかふところや風の通路

92 中々にあをはさくらのさひしさを匂ひつくなふ陰の山ふき

93 片山はくもをいてぬれとしらさらはそれとは見えし二上のみね

94 わつかにもくものうへにてならふかな嶺計なる二上の山

95 かいまにもちる花かけの見ゆる哉板戸のすきにフちる雪のこと

96 雨ふれはいやましにのみうちたれてかゝくへからぬ山吹のはな

(四・ウ) ㄱ

97 水のうへにふれはふりくるゆきにイて二ねはさくらのうかふ也
けり

98 かりそめに立かと見てし小田のかり帰るそらにも行けしき哉

99 よひよひにみしかくなりし程しるく早すかのねになる春日哉

100 めくるわにめぐりたくひて身をよそに逃るイすへの無そかなし
き

101 ほどひさにさきては在しもの乍けふなかくる初さくら哉

102 ゆくかはの岸を過行さくら花人あるかたによる心地かも

103 いけみつにちりのみうかふさくらはな流行世の在もしらすて

104 ねこまともつまとふころになりイにけり今年も末になりイにけらし

な

105 朝々おきかへるてのとにかくにむくも楽しき秋の一時

106 わかありしうへにつもれとえも見えて闇もよそなる軒の紅葉

107 夏乍ころもてさむみはすのはも袖巻はかり見ゆる朝風

108 はかくれにさけるやよまてよむたひに教たかひぬる薺の花

109 垣越てゆけりとおもへは顧るさまも見えたる朝かほのはな

(五・オ) ㄥ

110 をりとりて見むとおもへとなさけなく何地にも向朝かほのはな

111 この朝け秋風さむし老楽のわかそて計ふるふすろの葉

112 あすならてひらきもそめし朝兒のまことけふよりさかんけしきを

113 さひしらにはるくれ行は大そらに人もいなきて帰るむらとり

114 いつこにかゝへるむらとり又むれてはるとゝまれるけしきなる哉

115 ゆくりなくわきもこかともいひいてゝその人なきそ今はかなしき

116 いてし日はまたこかくれて有物をなへてそなたに向ふ朝かほ

117 かとをいてゝまつむかひたるよもの山けさゑみそむるけしき見かてら

118 たゝ一またあともなき春の哉わかなもいまた雪のものなる

119 花ちれはおのれもともに飛蝶のこゑ立つへき乱さまかな

120 はなちれは花にましりてとふ蝶もおなしけしきをなす心かも

121 たをるてのおよひおよはぬ程にしてなにこゝちするさくらなるらん

(五・ウ) ㄥ

122 かけたかきをへのまつの枝毎にみなたなゝせる藤なみのはな

123 ひよどりのひよとなくにはこゑかへてさへつるきけはゆたにもあるかな

124 かみこしにまとうつ柳いくたひか影さへ見えて驚かすらむ

(六・オ) L

125 青柳のわかてにとれる枝にたにすかりかほにもとふつはめかな

126 夕まくれにはかにけふのみしかくてまたみたらす帰る花かけ

135 青柳の青きひま／＼かくろきはすたく燕のつはさ也けり
あをやきにこもりつとへる燕を吹あらはせる軒の山風

127 たをりつゝかへるさくらをそのまゝにあすきて見むとノヨス帰夕暮

137 いつしかとこほれ／＼て川きしのうきもの花と見ゆるうの花

128 しほみては汀よりきてあなたより移らぬ花をうつす【岩陰

138 つるひけは土よりいてゝいもの子のおもしろさゝへかきりな
き迄

129 すゝけたる軒はゝなれてつはくらめむれましりたる青柳のいと

139 ときなしにさわける竹葉あまりにも任せ過たるこからしの風

130 風むかふにはの燕うちなひく柳のいととりもつきなて

140 埋火のもとにそおもふ谷川の氷の下の鯉のもかくれ

131 さかりよりましてそめつるちる花のおもしろさをはしれるわか
みは

141 わかこゝろたかふかしらす桜花ちるをゝしめとちるを急くは

132 さけりとも山さと人は告もせてこなたより杜花もとひけれ

142 をりもちて行かふ人もあまたなる花のさかりの空手さひしき

133 さくらはなさくもさかすも山郷の使にわかみなりかはらはや

143 さとことに花のさかりの一にて見もらすかたの在そくやしき

134 皆人もしりてあるへきけふなれとはるのはてともいひありきけ
り

144 うきことをおもふうちにもみるかこと枝さしましる花の俤

145 花のいとにまじる翠の糸柳いろさま／＼に見ゆるはる哉

146 さきいつるうめのはつ花ねやともまとも花の 入れしきして

(六・ウ) 一

147 やふれたるいほのゝきはやつまとひのよるひるなしの猫のかよ
ひち

148 いたふきのあれしひさしの梅かえにさはれるおとや軒のうくひ
す

149 おきへよりわかまへちかくさしてきて手にもあたふるいその小
波

150 いとゝしくまちもせしかとうめの花はるこぬ先に咲なつくしそ

151 庵のとをとゝとたゝくは梅かゝをこゝ入よとのよはの山風
やカセかとそきく

152 わかやとをすくはかりにて月かけのうつらすなりぬ手たらひの
水

153 花さかりやよひにのみもかたよりてさひしかりつるさきの二月

154 花さそふ風の行す急道をれて行方しられすなるさくら哉

155 土のうへにちるをちらさてそのままゝに花もて走朝あらし哉

156 これのみやこゝろつからのわさならむこのまくゝりて花そこほ
るゝ

157 行かよふ人のすそ風よき／＼て垣ねにつもる花のしらゆき

158 あられふり風にましれはうめさへもともにたはしるにはのおも
かな

159 なゝくさのなゝのかすこそすくなけれ野に摘行はいくらともな
き

(七・オ) 一

160 をりとりし枝の花さへ風ふけは一にちりて行かゝひなさ

161 うくひすのうつろふさまもかはるかなうめよりけなる青柳のい
と

162 はるきてはさむくもなきを竹の子のいくへつゝ【めるそはみのやへ】包か
も

163 はるさむく軒きはの風をによきかほにふくら雀のふくれさまはも

164 まきのほるしほやのけふりいくたひと限もしらす見たる夕暮

165 濼たゝさはかりの水にても川クマナセルのさまなす岩めぐり哉

166 みたれまふけさのあらしのさくら花うくへきそてもいたされす
して

167 ねて見れはおきてもみまくほしけなるやまひしらぬはさくら也
けり

168 あをかりし夏のままには立たれと枯たるあしの葉のさむさ哉

169 皆人にひろひとれともいはねとももてきておける波のよせ貝

170 わつかなるたらひにきぬるむらしくれ池に川せにふるけしきし
て

171 を山たのいなわにおけるいなこすら同じいろにもなれる秋哉

172 二俵三俵をさへかたにあげて蔵をいっているわかをとことも

173 いとけなき子のものいひのあぶなさに聞は涙もおつる老哉

174 うら人のいわしよりぬとさわく哉いろかハリぬる海の一むき

175 いちのいへはもえくひはかりのこりけりいかにあらひしまかつ
ひの神

176 こゝに人なしとしらすするわさならむオシマ檻をうつ青柳のいと

177 かげ行けとちりくる花は一なくえりもと寒き春の朝風

178 水のおもをみれはかなしやそのことくわか身に波のしわのよる
かと

179 たはれめのたはれすかたのいとはしさおのか心によしと見らめ
と

180 なにこともかしこまるへき事無におきてかましきひきかへる哉

181 うらによる波はたわさもなきものをいそのまさこのふるひたる
まで

(七・ウ) 一

182 追うせて行へしらすとかへりくるあとよりもちる山さくらかな

183 追々もおもひつくやとみる程にいそにくたくるおきつしらなみ

(八・オ)┌

184 引すてしむしろの下の蚕つゝり立たるふすまとやきる

185 ひよりのかしらの上毛さかたてゝうたてのさまや己か妻こひ

夜折花

186 一枝にてをふれしよりさくらはなをらぬ掬もやみにをりつゝ

187 おのれのみ枝たかくしてさくら花手も不及をわらひかほなる

188 め中さへいそかしけれとゝしのくれひなのでふりはまた哀アハレ

189 こしらへし荷積の舟のかすしらす汀に並としのくれ哉

190 いけにうつるわかゝけ見れば水その花さへ折てもたるなる哉

191 引はあらふ水なかれきてなつみ川清き根芹の有所哉

192 このもとにねやのともしひもていてゝいほのうちなる花こゝち
する

193 杯にちりうかひたるさくらはなおのれ多ひたるいろとこそ見れ

194 おなしくはこのまにのみもあらましを花とほさかるよひ／＼の
月

195 花をりてわかゝといつる人さへもかへさまほしく見るわらはか
な

(八・ウ)┌

196 花をりてかへるを見ればわかゝとをいつる人さへをしきたくれ

197 おのつから地にふりしはきえはてゝ初雪つもる神のしめなは

198 よと川の柳見かてらいてたてはまへこき過るわかになつみ舟

199 なほさりにとりし早苗も雨ふれはねつきて見ゆる昨今哉

200 おもしろくなひけとおもへはわつかにもうこきてやむる青柳の
いと

201 てをさゆる人こひしらに谷川のきしりても行花さくら哉

- 202 人ゆかぬ谷のましみつすみ過てさひしきのみは己かまに／＼
- 203 夜通【^{うかり}ふり】し雨ははれぬるをなみたくみたる花のかほかな
- 204 はるかぜのけしきかましき吹さまにしたかふものは柳なりけり
- 205 けしき立にはのさくらのさきそめはおのかこゝろにおのれまかせし
- 206 いふせくもかやりふすふるしつか軒よそよりみれはたゝならぬかな
- 207 いつくより落てきつらむ山さとはたく火のもとにまとぶくりのみ
- 208 かへるさは枝もちなれて山桜空手さひしきわかいへちかな
(九・オ)┌
- 209 はることにこゝろあて人遠きよりきます計もまつさくらかな
(九・ウ)┌
- 210 中々に人ゆく門はちりもなく荒草だてる垣のうちかな
アラ
- 211 あかしかた沖にきこえて子規ほの／＼しくもなのるよは哉
- 212 六月のそらいとはしき日をよきていへかけをのみすくるいち人
- 213 かはかりになりぬとおもへは道のへのくさのしなひも暑夏哉
- 214 くつのおとをさなけなるも過る哉まこと昼ともおもふ月夜は
- 215 夏はきぬ川へによりて家からむ流て清き水も見かてら
- 216 なかれ行もみちのいろと一いろに今そいろつくきの川蓼
- 217 なくそらの有明しろし子規明るもしらて鳴わたれとも
- 218 いてわれはおほつかなしや子規きゝつ／＼と人のいへるを
- 219 一こゑをまた鳴つれと子規こたひはとほくかすかなる哉
- 220 まちかくて鳴てあらめと子規ゆめには遠きこゑ計して
(九・ウ)┌
- 221 子規まちつかれてはねしかともなにおとにもめをさましけり

222 照月のまへなき過るほとゝきす隙のこまより早くもある哉
 223 あまた時そらに過して子規あけはなれ行空の一二
 224 あとよりも又きなくかと子規まてとも雪の羽立のみして
 225 ふるかたにいそきにいそく子規あとよりはるゝ雨はしらすて
 226 山のはをひとりいそきて出乍独はやくもゆくほとゝきす
 227 ほとゝきすとくきゝそめし朝より尊き人にもなるこゝろ哉
 228 たそかれのそらいそかしき子規くるれはなかぬものかほにして
 229 二こゑとかそへもさせず子規あたらおよひを折せつる哉
 230 たかきやになきても入て子規さやけき月のかけもさすなへ
 231 かひもなくをしみをしみて末遂に行に任する春のはてかな
 232 このもとにひろふもあまた在乍手毎にもたる椎の枝をり
 233 皆人のまつにまたれて中々におのれねられすなくほとゝきす

(一〇・オ) L

234 鳴過るこゑははつれて子規かすかになるを聞おそさかな
 235 ちかつかぬほどよりしらは子規早く過るもきゝもらさしを
 236 くらきよりつきてのこゑに杜宇待である身も驚かれけり
 237 夏乍なつともなしや山さとのかたはらはかり照すひの影
 238 すゝしさそいふよしもなき夏川の清く浅きにきぬる月影
 239 さきいてゝさかり過とも無ものをやかてしわめる夕かほのはな
 240 鶯のところかへこそかひなれいつこもはるはくれしこのまに
 241 何とかやさるこゝろなき人かほに生し立しもしらぬ花かな
 242 いつまでもわすれかねたるはるならむ二三さく山ふきのはな
 243 はるさめにぬるれはぬれて花に住鳥うらやむは翅也けり
 244 枝のまにとりすかるへき百鳥も居させぬまてにさく桜哉

(一〇・ウ) L

- 245 行水もすゝしくなりぬ杜若夏にこゝろのうつ【り行】^目まに
- 246 冬くれはいへといへとの細まにもあらし吹まくおとのする哉
(一・一・才)
- 247 ひろけれとさけ破たる芭蕉はの風もおとなきすかたのみして
- 248 鳥かへるそなたの空の遠山もやとのけしきにつゝくたくれ
- 249 はつ秋にこゑきゝそめしもずたにも紛てわかぬ春の百鳥
- 250 花見れはうめもさくらもわきぬるをゑめるかたちをくたく山風
- 251 けさも猶【蒼^{サケル}モ^モミ^エヌ】^ハかりの【梅^ミ乍^マふゝまる^ミ】^ホどは同じものかは
- 252 竹のこのおもひもかけぬ生所いつしかそこにきたるなるらむ
- 253 耳つくのみゝとめましますかた哉何をこ【つ】^スゑに聞てあるらむ
- 254 水にやはさし入ぬへきうめの枝^エもとのも^タと^マて花のさければ
エタノモトマテ
- 255 はかなくていとま在身はいたつらに軒の垂木の数をよむらむ
- 256 ひろのすの草はまさこにうもれけりきゆる雪まに末見ゆること
- 257 人ねせぬさとのをとめかから衣おのれともに夜あかしにして
- 258 野へ遠き砧の音もわかさとにうちあはせたるからころも哉
- 259 ちよろつの市の砧もしつかにてきゝかほなりやそらの月影
- 260 吹風のたえにし後はうつ人のこゑさへしたる秋の夜砧
- 261 さくらはな川上とほくなかきてもとのありかも今や忘るゝ
- 262 かす／＼のいそやならひてさひしきに人はすくなきひろの浦里
- 263 ちりのよはちりのまゝにもおかれけりわかるる畳構ふのみして
- 264 あかつきになれるもしらす夜深けに降いつる夏の雨の音哉
- 265 わきもこかけし鏡のうへにたにいつもおきある塵のよの中
- 266 独見るけふは日すからわかゝたに一葉もむけぬ竹の秋風

267 軒はあれてたわめるいほのひさしさへ思はぬものはつもる白雪

(一一・ウ) ㄱ

268 さはかりに垣をこえてはうめの花わかやとの木とおもふへきかな

269 ちかつけは入相のかねのかすかにもひゝきのこれるたくれのそら

270 朝夕のかしきもなしに諸鳥のうらやましかる己か世わたり

271 吹風のゆたけきけふは青柳のなひく姿になるこゝろ哉

272 もえいてし時計にてさわらひにひらけはまかふ葉も多くして

(一二・オ) ㄱ

273 吹風にこす多ならへてさくらはなちりまけしともちるあさけ哉

274 はるならば花おもひやる時なれやいつもねさめのあかつきの空比

275 わひぬれは灯たにも友とせてけちてわかぬくらやみのいほ

276 おもひやるこゝろたかひてありぬへしゆめ【まさにた】に見よ雪のふ

しのね

277 よそにして見るこそまされ何をしてあるかと【見ゆるまとのおもふ】灯【の

かけ】

278 さよふかみおきてこそ見め今ころや ノキノ やなきにきぬる【有明

の】月影

279 もろともにうれしからまし梅かえのさして移ふにはのうくひす

280 灯のきゆるやかてもうれしきはいつよりさせるまとの月影

281 あけはてゝみなしらくもになりにけり山か見えしのへの遠方アカツキノソラ

282 よき日のみつゝきてあれと今はまた雨ねがはしくなれる空哉

283 み冬より久に見さりしなこのえの此はつはるの雨のたくれ

284 一たにちれとおもへと風もこてわか杯をよくる花かな

285 こゝちよくうみとうけたる杯にいとかすか【なる三日】月【の】
影 ニモヤトル

286 いつとなくわたる／＼も楽しくて心かはれる野への川はし

287 まさこちにならひ立たる土筆またさむけれや頭のみして

288 ものわすれするそうれしき老らくの聞たひことにことめつらに
て

289 皆人のゆきならはともいはれけり長雨侘しき十一月の空

290 かす／＼もさせる枝哉うめの花いたしかねたるわかつてにもにす

291 いつよりかかくて見るらむ垣こしに隣の花をわかのはして

(二二・ウ) ㄥ

292 そのふにてめてしかをりはうめのはなこの一枝にこめてけるか
な

293 世のうさをのかれはてたるものかほにさしくる枝の垣のとう

め

294 わつかにも枝すゑはかりうつろひてかけみえかぬる川きしの梅

295 ことさらに朝かせさむき冬川に水際の鴨のをりとこころ哉

296 ふりぬれはまたちりかくす花さくら下なるいろおほひ／＼て

297 山さくら見にゆく人のさかりにも今はなりたる花をしる哉

298 をたのおものかりのあゆみの遅からてとくもいにける初春の空

299 やまと川小舟つとへてまねかほに柳のはさへよるみきはかな

300 さりとともおもふもみこそ老のみのまたつきはてぬこゝろさし
なれ

301 手にとほく水尾かろ／＼に行花はなかれて見するしわさ也けり

302 今よりはおのか時なるなつなれや汀のまつすかたすゝしき

303 おのれこそおもしろしとてあなた向こなた向てもちれる紅葉

304 とし／＼のふりみふらすみいつ過て時雨の雨のなかめなるらむ

305 をりとりて見ては折つるうめの花梢のほひなくもなるやる

306 なかれえでいとおもしろしにはたつみゆくさきしらすたとりか
ほなる

307 ことゝもにかはるゝもなくたつのごゑきゝしらぬみやこ人か
な

308 月いてゝみれはまとほしうわの花まことまちかく匂ひしものを

309 とひゝてそなたにいく庭いしや山川のせのわたす石はし

310 うめの花としのうちよりさきたれと春をみせてそをらは折へく

311 すかくとて鳥の折たる枝たにもをしきはそのゝ桜なりけり

312 たくひなき枝とおもひて花をれば杪に有そまたまさりける

313 青柳に枝さしいれて梅たにも打重すかたねかはしけなる

314 わかこゝろいそへの鴨のさそひいてゝかへるさしらす沖へ哉

315 秋乍立てはあれとおく霜に枯あしのほの末にすくなき

316 けふこそはさきてあらめといく度かみるやか山のさくらなるら
む

317 行きかよふ人かけたえて冬来は路にありくを田のかりかね
(一三・ウ) ㄱ

318 夏来はあをはにまじる花さくる花かとみれはみになりけり

319 いそとほく汀のかもめさそひいてゝわれもなみまにあることろ
かな

320 居て見ればひさのまへなるつくゝし立るすかたのおもしろき
哉

321 うゑおきし事をはらして土筆独生出しけしき立けり

322 いろかへぬまつのみとりもめてなれて初花ほしき下躑躅哉

323 山吹のかけ行はてゝにはかにも水いろさむし垣のもと川

324 みるものは柿一にもなりにけり梢空しき秋のくれかた

325 何をきて冬はいくつに行つらむみの脱すつる枝のみのむし

326 わらとちよふにこたふる山彦はまたわらはへのこゑそおかしき
へま
327 人にあへはとしの数とふ老のくせわかきかたをやよしとおもひ
て
328 かすしらすやとにさくらをうゑたれとあか任てまたゝらさけり
(一四・オ)┌
329 春のひのいとなかけはくるゝ時無ものかほにあそひつるかな
330 なかきひのはてもなけるはるなれとたくれかたになれは成け
り
331 あまりにもこゑあらはなるつまこひやのへのきゝすのたくれの
こゑ
332 なくひはりおのかそらにはゆかねともこゝろゆたけき春の野歩
行
333 秋ことにそれとはしるくかりかねのかと田にきゐる数も違へす
334 はるくれはかりのなくねそきかまうき帰る／＼といふこゝちし

335 寒ければ春のひかけの伸かねてちゝめるはたの土筆哉
て
336 二枝とはをらしといひしうめのはなけふはいくへになれるなる
らん
337 花の陰過行川のほしけにもまねひて過る潦水哉
338 うめかえに【なきし】鶯所さへまたあらためて鳴柳哉
なきし
339 いへさくらさくとしいへは川舟のもそろ／＼に人そ来にける
340 ちりはてし枝さひしとや山吹のさくらかまたにかゝりてそ咲
(一四・ウ)┌
341 夜すからのあらしもうれし垣こえてこなたにたるゝ千枝の山吹
342 なかゝきのうちどのこゑのきゝわかつてくるゝはをしき
けふの
う
くひすの【こゑ】
343 きしくひによりてうかへる花たにもとくうちゝらすむらさきの

空

344 をりとれる枝をあらしにあてしとてかくすも花のかけにさりける

345 水鳥はしるやしらすやおのか身の下くゞりくる沖つ白波

346 はるくれはあなこなたのとかけより霞引いてゞゆく小舟哉

347 むかへれは多むかけうつす増鏡はら立時に見るへかりけり

348 をすのうちにしはしも人をおかすして寒嵐に見する梅哉

349 いくはくか見にはきつらむをかへの梅より出て帰る人影

350 とよをかの梅のさかりに成ぬめり彼一家の主ともかな

351 なこのえのかすみ柵引朝朗ほのみ並てゆかぬもゞふね

352 いつこにもな引／＼てうなはらははるの霞の立所なりけり

(一五・オ) ㄥ

353 こゝをおきてあたし道をはゆかましやうめさかりなるやすの岡
越

354 うくひすのなく一こゑにわすれけりいつこにかゆくわか身なり
けむ

355 今一いま一とてうくひすのこゑにくれゆくたそかれの道

356 うくひすはいたくもうめになれにけり手折る枝に移くるまで

357 人の手をよきかほにして梅の枝またそらさまにさす道へ哉

358 をれかぬる枝にもをしむ程見えて花のこゝろを我そしらるゝ

359 にはたつみ庭になかるゝ汀にはいてしすさきもあるはかりして

360 折させるとこのうめのみましろくて春雨くらき庵のうち哉

361 たな毎にいろさま／＼にかさりたる市路の花はにしきなりけり

362 あたらしくなかれゆかしとせをよきて桜かたよる川の片岸

363 埋火にうもれてゐては梅の花待人なしと咲やかぬらむ

(一五・ウ) ㄥ

註

- 一 九大本翻刻『統草徑集』（穴山健氏『江戸時代文学誌』第二号）
- 二 『近世和歌集』（日本古典文学大系）久松潜一の解説参照。添紙は現在所在不明。

付記

本稿の資料閲覧、および翻刻については、天理大学附属図書館に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を表する次第である。

（しんとう やすこ・本学大学院博士後期課程）